少画数文字を用いた作品の表現

中村拓也（大郁）
NAKAMURA Takuya（Taiiku）

今作「閑心」は、二〇二一年の「大東文化大学の書」カレンダーの揮毫依頼により制作した作品である。これまで何度か依頼を頂き、今回が四度目の揮毫であった。思い返した時に九月を担当することが多く、今回も九月ということで、さて題材をどのようにしようかと考えていた。カレンダーの型式が従来の壁掛けから卓上になるということで、これまで取り組みたいと考えていた少画数の文字を作品に取り入れ、秋の静かな季節に合致するような落ち着いた作品となるように試みた。

また、卓上カレンダーの性質上、毎日の生活の中にあって常に目に入るものである。作品の基盤として、石刻の書とは異なる肉筆資料の文字にて制作にあたった。その文字がもつ躍動感や肉筆で有るが故に、日常に近い書になるようにと考えた。

二十世紀初頭より、続々と発見されてきた秦から漢代の肉筆資料は、書体変遷の確実な記録として重宝され、その字例も豊富になり、作品制作の幅も大いに広がった。今作では、筆画の省略による草書的表現、文字の特異性、筆の抑揚を利かせた線、入収筆の多様さ等の特徴を表現するように苦心した。

少画数な文字を用いた作品の制作において考慮すべき要素は様々あるが、作品全体の構成が重要である。中でもその文字がもたらす余白の処理によって作品が如何様にでも変化してしまう。今作では「心」の字形の特異性から作品全体の白と黒のバランスが崩れてしまわぬように少し線に太さを出し、存在感を持たせるように心掛けた。冒頭で述べた落ち着きのある作品となるよう紙面に対してほんの少し文字が小ぶりなるようにも留意した。

今回の作品制作により、書作品の用途に合わせた表現の重要性を再認識する契機となっただけではなく、今後の作品制作の更なる問題点を自身で発見することが出来た。これからも様々な取り組みを続けていきたい。

閑心

29.7㎝×44.8㎝